

日本の近代化を目にした西洋人知識人にとって「日本伝統文化」の意味するもの フランシス・ブリンクリーの武士道と日本陶磁研究

著者	ムスタツェア アレクサンドラ, 櫻庭 美咲
雑誌名	神田外語大学日本研究所紀要
号	15
ページ	72-59
発行年	2023-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001931/

《日本研究所主催講演会「世界の中の日本 第8回」要旨》

日本の近代化を目にした西洋人知識人にとって「日本伝統文化」の意味するもの

—フランシス・ブリンクリーの武士道と日本陶磁研究

ムスタツェア・アレクサンドラ
櫻庭美咲

本講演会では、親日家として知られた明治期の英国人フランシス・ブリンクリー (Francis Brinkley, 1841-1912) が日本研究を総合的な視点からまとめたシリーズ本 *Japan: Its History, Arts and Literature* (神田佐野文庫所蔵) をとりあげた。ブリンクリーは1867年にアイルランドより来日後、工部省工部大学校 (後の帝国工部大学校) 数学教師を経て、*Japan Mail* の経営者となり没年 (1912) まで東京に暮らした人物である。彼は、日本鼯眞・味方・親友といわれ同時代の日本人の理解と信頼を得、大隈重信等政界との結びつきも深く勲二等旭日章を受勲するほど敬慕された。ブリンクリーは、英国人の代表的日本研究者であるサトウ、アストン、チェンバレンに匹敵する、英国の最も重要な日本研究者の一人として西欧で認められるべき存在といえる。本書の多様な研究テーマから武士道、および日本陶磁の研究を紹介した。各講演の要旨は次の通りである。

講演1 ムスタツェア・アレクサンドラ

明治期のジャパノロジーにおける武士道—フランシス・ブリンクリーの「*Japan: Its History, Arts, and Literature*」を中心に—

はじめに—日本の「伝統」と「近代」を反響する武士道—

1983年に『創られた伝統』を出版したホブズバウムはカルチュラル・スタディーズや日本研究など、特に英語圏の文化人類学の分野を劇的に変え、「近

代化」と「伝統」についての新たな捉え方を導入した。ホブズバウムによると、「創り出された伝統」とは「通常、顕在と潜在とを問わず容認された規則によって統括される一連の習慣であり、反復によってある特定の行為の価値や規範を教え込もうとし、必然的に過去からの連続性を暗示する一連の儀礼的ないし象徴的特質。事実、伝統というものは常に歴史的につじつまのあう過去と連続性を築こうとするものである。[...] しかしながら、歴史的な過去へのそうした言及がある場合であっても、「創り出された」伝統の特殊性とは、歴史的な過去との連続性がおおた架空のものだということでもある。つまり、そうした伝統とは、新しい状況に直面した際古い状況に言及する形をとるか、あるいは半ば義務的な反復によって過去を築き上げるかといった対応のことなのである。」(Hobsbawm 1983:10)

ホブズバウムによると、以上のような意味での伝統の創出過程を経験したことがない時代や地域はおそらく存在しない。しかし、そういう過程で生み出される「伝統」は旧来の伝統（我々が伝統と呼ぶもの）ではなく、新しい形式の伝統であるといえる。そういう現象は「旧来の」伝統を生んだ社会システムを崩すような、大規模で急激な変化があったときにしばしば発生する(Hobsbawm 1983:14)。

日本では、「武士道」はそういう現象の一つであると考えられる。

「日本精神」と「伝統」の究極のシンボルとされてきた武士道は、今日でも我々（英語圏の）日本研究者の間で最も根強いステレオタイプの一つであるかもしれない。しかし、それがなかなか揺るがないことは、驚くにはあたらない。新渡戸稲造が「*Bushido - The Soul of Japan*」を英語で出版した1899年から現在に至るまで、「武士道」という言葉は日本文化や日本のアイデンティティを説明するために、弾力性のある、包括的な文化的カバーオールのようなものとして利用されてきたと言えよう。「神風」の現象でも見られるような愛国心や太平洋戦争への絶望的なコミットメントから、1960～1980年代に見られたサラリーマンの会社や国への献身的な行為まで、20世紀初頭以来、近代西洋の想像力は日本文化の様々な側面を非常にロマンチックに記述するのに武士（あるいは侍）やその「道」を頻繁に利用してきた。

この武士道の神話は、西洋の想像力だけでなく、日本の近代史をも何らかの形で支配していた。新渡戸稲造、または井上哲次郎のような明治時代の有名な

日本の近代化を目にした西洋人知識人にとって「日本伝統文化」の意味するもの

武士道理論家が武士道の普及に果たした役割については多数の文献が存在する。さらに、日本語による一次資料もすでに数多く発見され、それらがこの興味深い現象の複雑な絵を描いている。

では、「創られた伝統」としての武士道を生んだ明治時代を生きた英語圏の観察者はこのような現象をどのように見ていたのか。本講演では、明治期を代表する二人の英文学者、B・H・チェンバレンの「Things Japanese」(「Bushidō or The Invention of a New Religion」章)とキャプテン・フランシス・ブリンクリーの、Japan: Its History, Arts, and Literature (武士道あるいは武士の道)の2冊を取り上げて、「武士道」に焦点を当て、日本における「近代化」と「伝統」の議論の特徴を探っていく。

ブリンクリーとチェンバレンが観察した「武士道論」の進行—チェンバレンの「The Invention of a New Religion」とブリンクリーの「Japan: Its History, Arts, and Literature」を中心に—

ブリンクリーとチェンバレン

チェンバレンは、初期の英語による日本研究の第一人者であった。The Asiatic Society of Japanの会員及び東京帝国大学の教授(4年間という短い期間ではあったが)としての幅広い活動により、E・サトウ、W・G・アストンとともに、明治初期の日本学・日本研究の表舞台に立っていたと言えよう。チェンバレンは同時代、そしてその後の学界に影響力を持ち、特に1890年以降、日本政府を強く批判した人物としてジャパノロジーの分野でもよく知られている。Benesch 2014でも指摘されているように、チェンバレンの取っていた武士道や日本文化に対するスタンスは、英語圏の学識に大きな影響を与えたことが確かである。

明治期の日本研究者の中ではチェンバレンは今日でも優秀な存在として認識されているのに対し、キャプテン・フランシス・ブリンクリー(1841-1912)は現在ではほぼ無名の人物であり、英語によるジャパノロジーの歴史に登場することはほとんどない。では、なぜここでブリンクリーを取り上げるのか。ブリンクリーが初期の日本研究の脚注に過ぎない理由は十分には把握できていないが、彼の活動に関する最新の記録は僅かながらも、1881年から1912年まで

The Japan Mail という新聞の編集者として働いていた期間、同新聞が明治政府と財政的なつながりがあったことが窺える。そして、それがプリンクリーが脚光を浴びなくなった要因の一つであると考えられる。明治日本においては政府への批判がなかったわけではない。プリンクリーの場合、ジャーナリストとしての活動や学術的な研究、日本における英語教育への貢献、日本の歴史や陶芸、美術に関する知識は、しばしば認められ、尊敬されていたようだ。さらに、数十年「The Japan Mail」の編集者を務めるにとどまらず、長い間「The London Times」の常時特派員でもあり、明治時代においては彼の声が国内外の遠くまで届いたと言えるほどの人物であった。そして、プリンクリーの学問的及び個人的な興味関心に関して言えば、彼は一生涯、武士道というトピックに関心を持ち続けたと言えよう。

チェンバレンの「The Invention of a New Religion」について

チェンバレンのテキストは1911年に「The Invention of a New Religion」というタイトルで独立論文として初めて発表されるが、その後1927年に出版された『Things Japanese』第7版から、「Bushidō or The Invention of a New Religion」という、少し修正を加えたタイトルで、他の加筆や訂正が施されていないままに独立した章として追加される。ホブズバウムの提唱する「創られた伝統」より70年以上も前に書かれたこの論文は、御門信仰、それから国家神道の出現や武士道などについて近代的現象として論じており、伝統という概念を正に「近代的な現象」と捉え、優れた先進的なものであると言えるに違いない。

チェンバレンは、「武士道」という言葉自体は1900年以前に当時の英語圏の有名な日本研究者の間で未聞の言葉で、その時点まで存在しなかったことを強調する。つまり、「武士道」とは海外での消費を目標にした捏造神話にすぎず、最終的に日本国民もその神話を受け入れ、信じ込むようになったと述べている。

「宗教を司祭の発明としたヴォルテールをはじめとする18世紀の哲学者たちは、後世の研究者たちから表面的なものと蔑まれてきた。しかし、彼らの見解には結局のところ何かがあったのではないだろうか？ 後世の私

日本の近代化を目にした西洋人知識人にとって「日本伝統文化」の意味するもの

たちは、より批判的な時代になって、深く掘り下げる習慣を身につけ、時には鼻の前にあるものを見ることができなくなったのではないだろうか？現代の日本がその例である。【中略】日本は今この瞬間にも、宗教がいかに関特別な目的のために、つまり現実的な世俗的目的のために製造されるかを教えてくれているのです。【中略】すべての製造物は、それを作るための材料を前提とし、すべての現在は、それを支える過去を前提とする。しかし、20世紀の日本の忠誠心と愛国心の宗教は、まったく新しいものである。なぜなら、その中で、既存の観念がふるい分けられ、変化し、新しく配合され、新しい用途に転じ、新しい重心を見出したからである。」(Chamberlain 1983:82, 84)

以上の引用文は、チェンバレンの精緻な筆致のサンプルであり、それと同時に明治末期における日本政府の非自由主義的脱線と錯乱した政策を率直に批判する彼の勇気を示す素晴らしい例文でもあると言えよう。国家神道の進化という点に関する説明は、このテーマに関する後の研究とほぼ一致している。ここでチェンバレンが指摘しているのは、神道は、完全な「国民的個人主義の放棄」や西洋の価値観への完全な道徳的屈服を避けるべく、皇室制度を強化し国民の忠誠心を天皇に集中させるために明治の政治家によって利用されたことである。換言すると、「劣等国では知られていない」共通の高邁な理想や規範を掲げ、国民に「支配者の超自然的な美点がある程度は共有している」と感じさせることによって、武士道は国民にこの物語を信じ込ませるために不可欠な役割を果たしたと述べている。しかし、この(武士)「道」について、チェンバレンは以上のようなこと以外、ほとんど何も書いていない。そして、厳密に言うところ、チェンバレンの言葉自体が的を射ているかもしれないが、彼の理論全般は伝統としての武士道に対する健全な論証として成立しているとは言い難い。【中略】

ブリנקリーの「Japan: Its History, Arts, and Literature」

フランシス・ブリנקリーの書いた武士道関連の章は彼の最も有名な歴史書の一つである「Japan」(1901年刊、第2巻)に含まれている。「Japan」は1901年に出版され、チェンバレンの「The Invention of Tradition」のかなり

前に執筆されたものである。そのため、チェンバレンのエッセイと比べて多くの点では「時代性」及び時代背景が異なり、そのトーンも大きく違っている。日清戦争（1894-95）と日露戦争（1904-05）の間に出版されたプリンクリーの「Japan」は「第一次武士道ブーム」（Beneschの用語）の時期に書かれたというわけである。1880年代までは言葉自体がほとんど知られていなかったのに、1890年代に入ると武道への関心が高まり、明治時代以前にはほとんど登場しなかった「武道」や「武士道」という言葉が定着し始めるのである。すなわち、「武道」は武術を意味し、「武士道」は武士・侍の歴史に関連するものを指すようになった時期である。日清戦争の直後、1895年に行われた三国干渉を契機に日本が国際的に苦境に立たされ、自国の価値観に基づくアイデンティティを模索する内向き志向の時代でもあったと言えよう。このような流れの中で、「武士道」という言葉は徐々に社会のさまざまな場面まで浸透するようになる（Benesch2014）。

上述のような背景を念頭に、プリンクリーの「Japan」に描かれている武士道にはどんな特徴が見られるのかについて考えたい。一見、当時の欧米の読者が求めていた、日清戦争における日本の勝利の文化主義的解釈と同じタイプのものへの著者の関心から生まれたように思われる。しかし、当時のプリンクリーのジャーナリストとしての仕事ぶりや、章の内容をよく観察してみると、そうではなく、むしろ当時溢れるほどあった武士道に対する外国人の誤解を解きたいという根強い志から生まれたと推測できる。プリンクリーの執筆の直接的動機となったものは定かではないが、チェンバレンと同じく、新渡戸の出版した「武士道」もその一要因であったという可能性も否めないと思われる。確かなことは、チェンバレンの文章や新渡戸の「武士道」と比較してみると、「Japan」ではプリンクリーが武士道を優雅なものとして捉え、徹底的に扱っていることである。新渡戸の非常にロマンチックな武士道観とだいぶ違うし、そしてチャンバレンの挙げた御門信仰問題、皇室忠実な臣下としての武士像などの問題点の扱いもそうである。以上の引用文でも見られるように、プリンクリーの章の冒頭には二つの戦争の間に日本で広く行き渡っていた高揚したモードの痕跡が垣間見えるが、そこからの議論がよりバランスの取れた形で進んでいく。

考察

新渡戸の「武士道」論より、ブリンクリーの章の方が、よりニュアンスに富んだ読み物になっている。さらに、野心や忠誠心が原因で「血縁のひずみ」が簡単に切れること、裏切りや復讐の可能性が常にあること、敵に対する残酷さ、または武士の「信用できない」性格、つまり最も根本的な部分について言及するとき、ブリンクリーの姿勢はチェンバレンのほとんど変わらないことに注目しなければならない。二人とも武士道論の理想と歴史的現実を強く意識したことが窺える。近代における武士道観、または日本における愛国心の近代的起源については、ブリンクリーは次のように述べる。

「愛国心を育てるような条件や出来事は、実のところ何もなかった。自分の領地の安泰と繁栄が、武士の精神的な限界だった。しかし、明治に入ると、突然、愛国心の炎が国中に燃え上がり、以後、猛烈な勢いで燃え上がった。大和魂は理論的な感情であることをやめ、実際のインスピレーションとなった。【中略】彼らの歴史には、このような旺盛な愛国心が発揮される可能性を示唆するものは何もなかったのである」。

ブリンクリーの指摘は、後に武士道の歴史的連続性を否定するチェンバレンの指摘と驚くほど似ている。特に井上哲次郎の武士道論の中心にある天皇への忠誠の問題に関しては、ブリンクリーはその個人的な次元と、武士階級のメンバーにとっての全体的な歴史的意義を明確に否定している。そのみならず、天皇は武士にとって抽象的な存在でしかなく、武士の忠誠心は直属の上司にあった、とまで強調する。「武士が封建的な主君に捧げる忠誠心が、皇帝に対する態度にまで及んでいたとは言えない」。逆に、歴史的な観点で見れば、どちらかというとなら武士は明らかな「反皇帝主義者」であったと考えられる、とブリンクリーは述べる。さらに、武士が「皇室の特権を頻繁に侵害し、常に無礼な態度を示していた」にもかかわらず、この概念が近代まで存続していたことは驚くべきことであったと述べている (Brinkley 1903:207-8)。この点においても、ブリンクリーのスタンスは、チェンバレンや、最近の日本近代化論を先駆けていると言えよう。明治後期、日本人が「物質文明の本質の多くにおいて、自国が西洋諸国と巨大な隔たりを有している」ことを認めるとき、日本で

沸き起こった激しい愛国心の源泉を説明するにあたって、プリנקリーは、日本の近代国家形成過程における他者の発見が果たした役割を強調するが、その論証は10年も後のチェンバレン論よりも巧妙かつ徹底した方法でなされている。

武士道というトピックに対する二人の日本研究者のアプローチの主な違いは、「武士道」を記号として解釈するとより明確になる。つまり、チェンバレンは「シニフィアン」（言語的形式）に、プリנקリーは「シニフィエ」（内容）に、それぞれ着目すると言える。プリנקリーは、1905年のチェンバレンの「アテネウム」誌の論評へのレスポンスにて「近代日本におけるこの言葉をめぐる言語的变化を深く読み取ることはなかった」とも述べている。つまり、プリנקリーは言葉が常に変化している流動的なものであるので、時代の流行に乗って新しい言葉を採用しただけで、言葉のシニフィアンのみを把握しようとしていた。確かに、プリנקリーが前近代の武家階級と近代日本の将軍に対して深い尊敬の念をもっていたことは、「武士道」の議論が展開される章のみならず、彼の研究活動やジャーナリズム全体にわたって明らかである。この意味で、彼はチェンバレンとは逆の方向に向かうが、そのこと自体は個人的な体験に起因していると思われる（彼自身は元々軍人であり、来日し水戸藩の軍人の娘と結婚した）。チェンバレンの場合、日本が非自由主義に陥ったことで日本への愛着が薄れ始めたが、プリנקリーの日本への献身は決して揺らぐことがなかった。井上哲次郎の「武士道」が登場して、陸海軍から民間の教育機関にまで浸透した後も、プリנקリーの考え方は変わることはなかった。武士道や乃木大将に対する揺るぎない尊敬の念は、彼が世に見せた最後のものの一つでもあった。プリנקリーは健康を害し、1911年以降編集や執筆活動を中止するが、死ぬ直前の1912年に London Times の特派員として乃木大将の自殺や武士道について最後となる記事を書く努力をする。このように、プリנקリーは、来日当初から自らに課していた「外国人の見解に対抗する日本人の見解の擁護者」という役割を最後まで忠実に果たしたのと言えよう。しかし、プリנקリーとチェンバレン両氏は、視点が大きく異なり、しばしば意見が対立するにもかかわらず、いくつかの根本的な点においては一致しており、お互いの欠点を指摘しながらも相手を論破しようと試みていた。

プリנקリーもチェンバレンも武士道に関する新渡戸のアプローチを批判し

日本の近代化を目にした西洋人知識人にとって「日本伝統文化」の意味するもの

たが、結局、国内外において新渡戸の影響力に対抗することができなかった。「讚美の永久香は武士道の神前で季節を問わず焚かれた【中略】このことは、やりすぎだったのだ。大げさな表現、センセーショナルリズムに走るのは、この神経症的な時代の習性である。幸せな平均値の冷静な色合いは、20世紀的なピッチに心を動かされた人々には、ほとんど魅力がないのだ」とプリンクリーが書き残してから、年月がずいぶん経っているが、その言葉は現在もお真実味を帯びていると言えよう。

参考文献

- Benesch, Oleg. 2014. *Inventing the Way of the Samurai: Nationalism, Internationalism, and Bushidō in Modern Japan*, Oxford: Oxford University Press
- Brinkley, Francis. 1903 (1901). "Bushidō or The Way of the Samurai," in *Japan — Its History, Art, and Literature (vol. II)*, London: T.C & E.C Jack, pp. 173-228
- Chamberlain, Basil Hall. 1985 (1939). "Bushidō or The Invention of a New Religion," in *Things Japanese (Complete Edition)*, Tōkyō: Meichofukyukai, pp. 80-95
- Hoare, James. 1999. "Captain Francis Brinkley (1841-1912): Yatoi, Scholar and Apologist," in *Britain and Japan: Biographical Portraits vol. 3*, Abingdon: Routledge, pp. 99-107
- Hobsbawm, Eric, Ranger, O. Terence. 1983. *The Invention of Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press
- Japan Mail Office. 2005-2015. *The Japan Mail [Reprint ed.] (1870-1917)*, Tokyo: Edition Synapse
- Koizumi, Kazuo. 1936. *Letters from B.H. Chamberlain to Lafcadio Hearn*, Tokyo: Hokuseidō
- Nagamori, Kiyoshi. 2020. "Francis Brinkley: a Japanophile Englishman in the Meiji Era," in *Research Reports of Tokyo Metropolitan College of Industrial Technology*, available at <http://id.nii.ac.jp/1282/00000243/>
- Ota, Yuzo. 2011 (1998). *Basil Hall Chamberlain: Portrait of a Japanologist*, London: Routledge
- Sawaki, Chieko. 2017. "Nihongo shinbun no shibō kiji ni miru F. Burinkurii no gyōseki to hyōka" (The Evaluation and Achievements of Francis Brinkley by Viewing the

Obituaries of Japanese Newspapers), in *Kyōei design kenkyūronshū vol. 11*, February 2017, Meiji University, pp. 1-20

Smith, Henry. 1980. *Learning from Shōgun: Japanese History and Western Fantasy*, Santa Barbara: University of California Program in Asian Studies

講演2 櫻庭美咲

西洋の王侯貴族が愛した柿右衛門様式磁器の乳白—フランス・ブリンクリーの研究が与えた影響—

はじめに

アイルランド生まれの英国人フランス・ブリンクリーによる著書『日本：その歴史、芸術と文学』(F. Brinkley, *JAPAN Its History Arts and Literature*, vol. 1-8, T.C & E.C. Jack, London, 1903-1904. 神田外語大学附属図書館所蔵)を取りあげる。本学附属図書館の貴重書コレクションには、同シリーズのほかにも1875年刊『語學獨案内』(書名は正字の使用を含め原書の表記通りとする。以下同様)、1897、1904年刊『和英大辭典』および1897年刊『日本：高名な日本の権威と学者による叙述と図版 *Japan: described and illustrated by the Japanese* [...]』10巻本をふくめ、ブリンクリーの著書が豊富に所蔵され、まとまりのある一群を成している。そのなかから本講演では、『日本：その歴史、芸術と文学』第8巻『陶磁芸術 *KERAMIK ART*』掲載の肥前磁器研究のなかでも特に、彼が用いた「乳白 milk-white」という用語が彩壺会の研究を通じ、今日にいたるまでわが国の柿右衛門様式磁器研究に及ぼし続けた影響について考察するものである。

ブリンクリーは、大政奉還の1867(慶應3)年来日し、工部省工部大学校(後の帝国大学工科大学)の数学科教員などを経て1881年より約三十年間にわたり英字新聞『*Japan Mail*』の社主を務めた。1885~97年・1897~1912年にはロンドンの『*Times*』の東京通信員としても欧米に影響力を持ち、英国における日本への世論を好転させることを通じ1902年の日英同盟締結に貢献したとされる。報道のみならず政界とも密接に関わる旺盛な活動の傍らブリンクリーは

日本の近代化を目にした西洋人知識人にとって「日本伝統文化」の意味するもの

日本にかかわる研究を行い、数多の著作を世に送った。その守備範囲は頗る広く、後述の通り政治、語学や文化、芸術、歴史分野にまでおよぶ。語学研究は後述の辞典等に、歴史・芸術についても数多の著書や論文を発表した。なかでも先述の『日本：その歴史、芸術と文学』は、日本の文化、芸術、歴史研究を8巻の大規模なシリーズ本であり、8回版を重ねた。

1. 彩壺会の柿右衛門様式磁器研究にみる「濁し手」という用語

『陶磁芸術』「第2章 肥前焼」と彩壺会著『柿右衛門と色鍋島』（1916〈大正5〉年）に共通して使用された、柿右衛門様式磁器の釉色を示す「乳白」という用語をキーワードに、『陶磁芸術』が彩壺会の著作を通じその後の柿右衛門様式磁器研究に及ぼした影響について考察する。

大正時代の代表的な陶磁史研究者で、大河内正敏らとともに彩壺会を設立した奥田誠一（1883-1928）は、岩崎家所蔵の陶磁器の調査を依頼され、プリンクリー・コレクションの肥前磁器を調査し、その内容を1923（大正12）年に「清澄園蒐蔵陶磁器目録」にまとめた。さらに奥田は、1927年創刊の陶磁研究雑誌『陶磁』創刊号において、ジィムズ・L・ボウズ、オーグスタス・W・フランク、エドワード・S・モース等と並ぶ代表的な日本陶磁研究者としてプリンクリーの名を挙げている。この言説により、プリンクリーの陶磁研究は彩壺会のメンバー達に共有されていたものと推測される。

さらに、三井系企業の重役を務めた福井菊三郎（1866-1946）は、1926（昭和2）年に著書『日本陶磁器と其國民性』を刊行した。福井はその典拠として当時の代表的な陶磁史関係書7冊とともにプリンクリーの『陶磁芸術』を挙げた。それらのうち柿右衛門様式磁器と鍋島磁器に関する情報が豊富で『柿右衛門と色鍋島』刊行以前の出版物は『陶磁芸術』においてほかにない。

これまで一般的に、柿右衛門様式磁器の美的表現の優位性を評価した具体的な所見は、1916（大正5）年の彩壺会『柿右衛門と色鍋島』（彩壺会1916）が最初といわれてきた。同書では柿右衛門様式磁器の素地の色について次のように記されている。「柿右衛門を見る人の、先第一に成興を起す處は、其地肌にある、其素地であると、自分は信じて居る。玲瓏たる乳白〔引用文の中の下線は筆者の加筆。以下同様〕の光澤ある素地は、何とも云へぬ温味のある、柔か

い快感を與へる許りでなく、夫れに燭れた時の、觸覺の愉快さをも聯想させる。而も白高麗や饒州窯の様に、稍透明の處がないから、冷やかな技工に走り過ぎた様な、感じを起させずに、飽く迄落ち附いて居る。此點は古九谷や鍋島の遠く及ばない處で、丁度十六七世紀頃のデルフトの素地を、一層堅實にして其弱々しい處を、取り去った趣きがある。」柿右衛門様式磁器の素地の色を「乳白」とするのは、和文献では管見の限り同書が初出である。しかも「乳白」の語は同書の本文や作品解説に実に14回も連続して使用されているため、この語の存在感はあまりに際立っている。ちなみに同書では「濁し手」という用語は使用されていない。

2. ブリンクリー著『陶磁芸術』における柿右衛門様式磁器の解説

ブリンクリー著『陶磁芸術』の「酒井田柿右衛門」に関する項目では、花の丸文、龍、鳳凰、竹、梅、松などの代表的なモチーフ、文様を数か所に偏在させ、広い余白を設ける所謂非対称の美など、柿右衛門様式に美質が的確に叙述されたことに加え、釉薬の色の特徴について次のように述べる。「柿右衛門の焼物、あるいは彼の流派の焼物には、乳白色 milk-white の表面が見られ、時には朝鮮や中国の象牙色の白に近いものもある。」また、同書の柿右衛門様式磁器と鍋島の比較に関する項目では、「柿右衛門の焼物、あるいは彼の流派の焼物には乳白色 cream-white の表面が認められ、時には朝鮮や中国の象牙色 ivory-white の白に近いものもある。」と述べている。柿右衛門様式磁器の色について、彼は「milk-white」と「cream-white」という2種類の用語を用いているが、日本語に訳せばどちらも「乳白」になろう。このようにブリンクリーが、彩壺会が用いた「乳白」に相当する「milk-white」や「cream-white」という用語を先行して用いたことに注目したい。

3. エドワード・グレーのギャラリーの売立目録

加えてブリンクリーは、1885年にニューヨークのエドワード・グレーのギャラリーで開催された彼のコレクションの売立のための目録『*DESCRIPTION OF "THE BRINKLEY COLLECTION" of Antique Japanese, Chinese and*

日本の近代化を目にした西洋人知識人にとって「日本伝統文化」の意味するもの

Korean Porcelain, Pottery and Faience』(Gallery of Edward Greey, 1885)に解説を寄せている。これは短編であるが柿右衛門様式に関わる内容は『陶磁芸術』と重なる。彼の「柿右衛門」観はすでに1885年時点で確立していたと思われる。該当部分を抜粋する。「柿右衛門の作品の素地はきめ細やかで汚れなく、叩くと澄んだ鐘のような音がする。その愛らしく柔和でありながら艶やかな乳白色の釉 milk-white glaze は、みごとに調和した簡素な絵付けの背景をなしている。上絵具は透き通り色調は豊かであるが、色数は少ない。マットな赤、草色の緑そして青紫の色がその基本色である。装飾モチーフとしては、花文様が最も一般的であろう。しかし龍や鳳凰、竹、梅、松、飛翔する鳥、柴垣、様々な形の菱形文様などもしばしば描かれる。このやきものの特徴は、絵付けの希薄さだけでなく配置にも表れている。文様は器全体に分散させるのではなく数箇所に集中している。この作品は、余白を可能な限り広く設けた小さないくつかの絵に囲まれたかのようなのである。」(拙訳)

柿右衛門様式磁器の最大の美質を表す釉の色調を表す用語「乳白 milk-white」の初出は、和洋を通じこの売立目録の解説であったと推測される。また、プリンクリーが柿右衛門作と考えた作品の特徴が、静嘉堂文庫美術館が所蔵するプリンクリー旧蔵の柿右衛門様式作品「色絵秋草文八角瓶」、「色絵団龍文蓋物」、「色絵孔雀牡丹文輪違透小鉢」にみられる特徴と見事に共通することにも気付かされる。プリンクリー・コレクションが岩崎彌之助にコレクションを売却したのは、恐らく清澄園八角堂が完成した1890年頃と推測される。したがってプリンクリーは、売立目録の解説を執筆した当時、静嘉堂文庫美術館が蔵する磁器コレクションを手元に置いて研究することができる状況にあった。さらに、彩壺会『柿右衛門と色鍋島』において、柿右衛門様式磁器の乳白色の素地の色を白高麗や中国磁器と比較して論じる考え方も、プリンクリーの本書の主旨と共通している。

4. プリンクリーが使用した用語「乳白 milk-white」の先進性

明治期における柿右衛門様式磁器に関する日本側の解説は、一般的に窯業史や生産窯に関する情報に重点が置かれ、磁器の美質を捉える作品観察に基づく叙述はみられない。西洋でも、プリンクリーが参照したことが明らかな先述の

G.A. オーズレイ & J.L. ボウズ著『日本の陶磁芸術』に柿右衛門様式磁器の作風に関する具体的な記述は乏しく、「milk-white」という用語は使用されていない。また、本書刊行以前の他の欧文献でも、柿右衛門様式の釉に「milk-white」という用語を当てる例は管見の限り前例がない。したがって、「milk-white」という素地の色から柿右衛門様式磁器の美質を把握する思考法は、ブリנקリーが生み出した独自の理論であったと思われるのである。

しかも興味深いことに『陶磁芸術』では、「milk-white」が鍋島焼と平戸三川内焼にも採用されている。鍋島焼の釉薬は「純粋な乳白で、柔らかく安らかな色調である」「表面の乳白色は産地と品質の証である」、平戸三川内焼については「美しい平戸焼の素地は乳白で、クレーパーの粘土のようにきめ細かい」と説明された。しかしながら、『柿右衛門と色鍋島』では色鍋島に関する解説に「乳白」の語は一切みられない。しかし、彩壺会がこの語を柿右衛門様式磁器だけに用いたことから、柿右衛門様式に固有の用語として「乳白」が定着するに至ったのではないだろうか。

結語

柿右衛門様式の美を語る上で欠かせない「乳白 milk-white」という用語は、1885年にニューヨークで刊行された売立目録の記述が初出であるが、それよりはるかに発行部数の多い『陶磁芸術』によって総合的な形で伝えられた。本書は彩壺会メンバーたちの考察の源泉となり、「乳白」という用語は彩壺会の『柿右衛門と色鍋島』を通じて広まり、その後の肥前磁器研究に継承されたものと思われる。彩壺会が引用したと推測される「乳白」という用語を、ブリנקリーは柿右衛門様式のみならず、鍋島、平戸焼の特徴としても使用した。しかし、「乳白」の語は『柿右衛門と色鍋島』において柿右衛門様式だけに選択的に用いられた。このことにより「乳白」は、柿右衛門様式の最大の特徴を表す用語として突出して認識され、現在にいたるまで柿右衛門様式磁器の美しさの根源をもっとも端的に表す用語として継承されてきたものと思われるのである。